

OED Onlineに見るワードペアの競合関係

青 木 繁 博

Competitive Relationships of English Word Pairs in the OED Online

Shigehiro Aoki

0. はじめに

OED Onlineに採録されているワードペアの語義説明中には、別のワードペアによる言い換えによってそれがなされているといった例が見られることがある。これらのワードペアの組み合わせの中には、単に同じ意味を表すワードペアというよりも、両者の間には競合関係があって、通時的に見て、どちらかがもう一方に取って代わっているような事例が存在している。本論文では、OED Onlineに見られる具体的ないくつかのワードペアの競合を記述することに加えて、その競合関係が、ワードペアを含む表現や語句の言語変化に影響している点などについて論じていく¹。

1. 本論文の背景など

1.1. OED Onlineの語義説明に見られる別のワードペアについて

筆者は、青木（2019）において、OED Onlineにはおよそ2,000例のワードペアが「見出し」または「小見出し」として収録されていることを示した²。それらの中には、語義の説明の中に、見出しなどの語句とは異なるワードペアが見られるケースがある。これについて一例を挙げると、(*by*) *some and some* には、以下のような語義の説明および *by little and little* という現代英語でも用いられている別のワードペアについての言及が見られる。

† *c. (by) some and some*, by little and little; by degrees; gradually. Obsolete.

(*some*, *pron.*, *adj.*¹, *adv.*, *and n.*¹, *A. pron.*, **4**. より一部を抜粋)

一般的に言えば、辞書の説明の中に同種の表現が紹介されるときは、同じ意味のものや似たような意味のものが示されたり、同じ意味ではないが同様の文脈で見られる表現などが示されていると考えられる。さらに、古い表現や廃語となったものなどに対しては、新しいものやより広く用いられる表現が示されることが多いと考えられる。

また中には、下に挙げた *crochets and loops* のように、厳密に言えば語義の説明はなく、もっぱら別

のワードペア（ここでは *hook and eye*）を示すことによって説明がなされるものもいくつか見られた。

† *crochets and loops*: hooks and eyes.

(loop, *n.*¹, **l. a.** より一部を抜粋)

場合にもよるが、辞書は採録された語句についての理解を助けるものとするならば、見出しや小見出しのワードペアそのものと、それらの語義説明中に見られるワードペアとを比較すると、どちらかと言えば後者の方が、一般に広く知られている表現であるケースが多いように思われる。また、特に廃語・廃用となっているワードペア（OED Onlineにおいては *Obsolete* や†などの記載があるもの）に関しては、それらの語義説明中に見られる別のワードペアは、より新しく生じたものであり、それによって「取って代わられた」と考えることもできるのではないだろうか。

上記のように、いくつかのワードペアの間で交代が起こった可能性があるかと推測される場面はいくつか存在するが、具体的にはどのような経緯があって、そうした交代が起こったのか、一時期は使われていたワードペアがどのように使われなくなったかなどについては、まだ不明瞭な点も多い。そこで、この研究では、二つ以上のワードペアが短い期間でも並び立っていたような状況、通時的に見ると競合していたような状況があったとすれば、それが進行していたのはいつの時期か、どのような様態であったかなどをより詳しく記述することで、ワードペアの交代という一種の言語変化をよりの確に捉えることができると考えた。もちろん中には推測によるものにならざるを得ない面もあるが、それでも、特定のワードペアの初出年などOED Onlineから具体的にわかる事柄を整理することによって、複数のワードペアに関わっている競合を、より明確に記述することができ、それらを含む表現のいくつかが、どのような経緯で今の形になったのかの分析につながるのではないかと考えた。

1.2. 本論文における考察対象と研究課題

本論文では、現代英語の観点からは廃れていると考えられるワードペアを主な対象とし、OED Onlineの語義説明中に別のワードペアが見られるものを抽出した。そのような同義・類義の二組のワードペア（場合によっては三組以上のワードペア）を特定し、さらに初出年などを調べて比較を行った。これを通じて、ワードペアをめぐる競合関係やそれに伴う言語変化をより具体的に捉え、その背景を探ることが今回の研究の目的となる。

本論文で明らかにしたい点をまとめると以下ようになる。

1. OED Onlineに見られる、競合していると考えられるワードペアには具体的にどのようなものがあるか。また、それらには、使用年代などの面で、どのような特徴が見られるか。
2. 複数のワードペアが競合する場合、併用されていた期間や、どちらが廃用になるかが決まる要因など、何らかの法則性は見られるか。
3. 競合していることが、関連する複数のワードペアには具体的にどういった影響を及ぼしているか。

2. 調査と考察

2.1. ワードペアの競合関係の記述

前章の観点に基づいて、ワードペアの競合についてまとめたのが表1である。A欄には、どちらからと言えば前から使われていたワードペア（競合を通じて廃語・廃用になったと考えられるものを含む）を、B欄には、その表現に取って代わったと考えられるワードペア（少なくともOED Onlineの記述等からはそう受け取られるもの）を記載した。表では併せてそれぞれの初出年を示している。なおこれらの中には、言い換えた表現がOED Onlineでは見出さまたは小見出しとしては採録されていないものや、and以外の接続表現を使うものと交代したと考えられる例なども、一部には含まれている。

表1：OED Onlineに見るワードペアの競合関係

A	Aの初出年	B	Bの初出年
one after one, one and one	eOE, OE	one by one	IOE
toward and froward	a1300	to and fro ※後述	1340
thorough and thorough	c1300	through and through	?c1200
new and new	c1385	over and over	c1400
in short and plain	c1386	briefly and plainly	採録なし
now and eft, now and now	a1393, c1395	now and anon, now and again	a1641, 1840
safe and sicker など3例	a1398	safe and sure	c1425
(by) some and some	1398	by little and little	a1425
man and woman	a1400	male and female	a1382
whole and some	?a1400	one and all	a1325
hosed and spurred	c1400	booted and spurred	c1450
full and whole	1402	whole and some	?a1400
stout and rout	c1450	stoop and roop	1728
course and recourse	1461	comings and goings	1550
crochets and loops	a1475	hook and eye	c1626
piece and piece	a1522	piece by piece	a1500
pound and pound	?1542	pound for pound	1600
once and away	1574	once and for all	1814
by fits and spurts	1605	by fits and starts	1627
shout and cry	1609	hue and cry	c1503
to and again	1612	to and fro ※後述	1340
peel and poll	1641	pill and poll	1528
there and thereabouts	a1696	there or thereabouts	1825
pick and cull	1705	pick and choose	c1450
egg and bird	1711	first and last	1582
humps and grumps	1727	slights and snubs	採録なし
cake and gingerbread	1755	piece of cake	1936
wheel and axis	1821	wheel and axle	1773

上の表では、基本的には年代順に例を並べたが、古英語期・中英語期については、競合するワードペアのどちらが先に起こったかは明確にはわからないものも散見された。しかし時代が下るにつれて、既存のペアに対してより新しいワードペアが生じ、交代現象が起こっている様子が全体としては窺われる。ただ、その後も表現によっては、競合した方の表現がむしろ初出が早い場合もないわけではない。おそらく、その時点では新奇な表現または新語などとして登場したものが、一時的には使われたが、結局は既存の表現へと、より一般的な表現へと収斂していったという経緯が考えられる。総じてみると、ワードペアの交代は単純に新しいワードペアと入れ代わるケースばかりとは言えないようである。

なお、上に述べたような「一旦は別の表現が主流となるが、再び戻る」といった変遷は、青木（2020）で論じた、ワードペアの語順の変遷と共通している面がある。いくつかの慣用的なワードペアの語順については、はじめから語順が決まっているわけではなく、一時期は逆の語順も使われながらも、次第にどちらか一方の語順の方にまとまるといった変遷をたどる例が多く見られる。ただ、それらの中には、必ずしも新しく生じた語順の方にとって代わられるのではなく、むしろ古くからある語順の方が、一時期は廃れそうになったとしても逆に定着するといったケースもあった。このような点は、一様に一方的に変化していくばかりではない、ワードペアの変化の（ひいては言語変化全般の）複雑さを示す例とは言えないだろうか。

なお、上に含まれるワードペアのうち、*to and fro* に関連するものについては、次の節で詳しく考察する。

2.2. 複数のワードペアと競合した *to and fro* に関する分析

表1にも示したように、*to and fro* は、複数のワードペア（*toward and froward* や *to and again* など）の語義説明として用いられていた。そこで、*to and fro* 自体の語義説明に目を転じると、それ自体が多様な意味・用法を持ち、それらの各々に対して、さらに *from side to side* や *backwards and forwards* など、異なるいくつかのワードペアによる語義説明がなされていることがわかった。この点からは、*to and fro* は複数のワードペアと競合していた、すなわち複合的な競合関係があったものと推測される。

上記の複合的な競合関係に関して、OED Onlineでの記述を基に、*to and fro* に関連する表現の初出年などをまとめたのが表2である。この表からは、当該表現の意味・用法が多岐にわたることや、意味・用法により競合が起こった年代もさまざまであること、また競合していた期間に着目すると、場合によっては競合自体の重複が生じていることなどが見て取れる。そして、そうしたワードペアの多くに、長い

表2：*to and fro* と関連する表現、OED Onlineに見る初出年と最終年

関連するワードペア	初出年	最終年
hither and thither	c725	1871
up and down	a1200	1974
here and there	a1325	1879
toward and froward	a1300	1470-85
to and fro	1340	1906
from side to side	?1440	2012
backward and forward	1581	1878
to and again	1612	1888

間をかけて *to and fro* が取って代わった、または現時点では共存していることが示されている。このような点から、改めて *to and fro* に関連する競合には複雑な面があったとすることができるであろう。

ところで、*to and fro* に含まれる単語 *fro* は、現代英語においてはこのワードペア以外ではほとんど使用されないもので、ほぼ廃語であると考えられている。しかしながら、ワードペアとしての *to and fro* は比較的良好に知られており、OED Onlineでも「小見出し」ではなく「見出し」として採録されている。単語そのものよりも、それが含まれる表現が長く残っているような現象については、どのように理由付けができるだろうか。

ここでは、本論文におけるワードペアの競合という観点も踏まえて、上のような現象についての分析を試みようと思う。*to and fro* は表2に示したように複数のワードペアと競合する状況にあり、その点からは、廃用に向かう言語変化への圧力が強かったと推測される。半面、当該のワードペアは比較的初期段階から多様な意味・用法で用いられており、この語句一つで多くの意味を表すことはいわゆる経済性の観点からは理にかなっているであろう。そして、結果として上述のさまざまな競合に埋もれることなく生き残ったことで、多様な文脈・状況にも対応できる利便性のある表現として、かつ他とは異なり、いわば他のどれとも取り換えのきかない表現として、定着していったのではないだろうか。ワードペアの競合関係は、ここで端的に見られるように、一方のワードペアが廃れることを通じてもう一方のワードペアを強化する役割を果たすこともあると推察される。

上のような複合的な競合関係は、単語 *fro* そのものには起こらなかったと考えられる。単語 *fro* にも競合はあったが、おそらくは *from* との単一的な競合を通じて廃語へと向かうことになったのであろう。ここにおいて、表現と単語との乖離が生じたのではないだろうか。

以上のように考え、これを一般化するならば、ある単語がワードペアに含まれるとき、「単語の改廃」と「ワードペアの改廃」の局面それぞれは、他の単語との競合および他のワードペアとの競合という異なる方面での競合関係にとらわれていると考えられる。それらは必ずしも連動するのではなく、大きく異なる経緯となった場合には、どちらかが廃用になったとしてももう一方は残ることがあり得る。このように、ワードペアになること自体が、言語変化（ここでは語の改廃など）において、一定程度以上の影響があると考えられる。

3. むすび

古英語期・中英語期のワードペアの競合は、ほぼ同時代に生じたものが重複して使用されることが多いようだったが、初出年などをさらに詳しく特定していく必要もあると思われた。それ以降のものは、基本的にはより新しいワードペアが生じて競合するが、新しい方に入れ代わるのか、それとも前からあった方が残るのかは場合にもよりさまざまであった。また、複数のワードペアの間で起こった競合の事例からは、ワードペアの競合関係は、言語変化の面ではかなりの違いをもたらすものの一つであると考えられ、そこに関連する単語や語句の改廃には大きな影響を及ぼしていると考えられる。本研究では主として通時的な観点から考察を行ったが、今後は共時的な観点からも、すなわち、今使われているワードペアで同義・類義のものがあれば、競合関係をより詳細に見ていくなどの研究を続けたい。

注

- ¹ 本論文で示しているOED Online内の記述やデータは、論文執筆時点の2021年2月1日までに調査したものに基づいている。OED Onlineは随時更新されるため、アクセスする時期によっては異なる結果が示されることがあり得る。
- ² ワードペアをどう定義付けるかについては、青木（2019）などで先行研究ではどのように呼ばれているかといった点を含めて論じている。

コーパス

OED Online. <http://www.oed.com/>

参考・参考文献

- 青木繁博（2019）「OED Onlineに見られるワードペアについて」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第49号、11-17.
- （2020）「通時的に見るワードペアの語順の交替」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第50号、71-79.
- Cooper, William E., and John Robert Ross (1975) "World Order." *Papers from the Parasession on Functionalism*. Eds. Robin E. Grossman, L. James San, Timothy J. Vance. Chicago Linguistic Society, 63-111.
- Gustafsson, Marita (1975) *Binomial Expressions in Present-Day English: A Syntactic and Semantic Study*. Turku: Turun Yliopisto.
- （1984）"The Syntactic Features of Binomial Expressions in Legal English." *Text* 4, 123-141.
- Katami, Akio (2009) "Word Pairs in Middle English Mystic Prose of the Fourteenth Century." 『埼玉学園大学紀要』経営学部篇 9, 177-189.
- Kikuchi, Kiyooki (1995) "Aspects of Repetitive Word Pairs." *POETICA* (Tokyo: Shubun International Co., Ltd.) 42, 1-17.
- Koskenniemi, Inna (1968) *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto.
- （1975）"On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 212-218.
- （1983）"Semantic Assimilation in Middle English Binomials." *Studies in Classical and Modern Philology: Presented to Y. M. Biese on the Occasion of his Eightieth Birthday, 4. 1. 1983*. Eds. Iiro Kajanto, et al. Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia, 77-84.
- Leisi, Ernst (1947) *Die tautologischen Wortpaare in Caxton's "Eneydos"*. New York: Hafner.
- Malkiel, Yakov (1959) "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8, 113-160.
- Miwa, Nobuharu and Su Dan Li (2003) "On the Repetitive Word-Pairs in English—With Special Reference to W. Caxton—." 『鹿児島大学法文学部紀要 人文科学論集』58, 49-66.
- Mollin, Sandra. (2012) "Revisiting Binomial Order in English: Ordering Constraints and Reversibility." *English Language and Linguistics* 16. 01, 81-103.
- （2014）*The (Ir)reversibility of English Binomials: Corpus, Constraints, Developments*. Studies in Corpus Linguistics 64. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Shibata, Shozo (1958) "Notes on the Vocabulary of *The Book of Margery Kempe*." *Studies in English Grammar and Linguistics: A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al. Tokyo: Kenkyusha, 209-220.

- Shimogasa, Tokuji (1997) "Binomial Expressions in *Le Morte Arthur*." *Bulletin of the Faculty of International Studies, Yamaguchi Prefectural University* 3, 59-74.
- Spears, Richard A. (2000) *NTC's American Idioms Dictionary: The Most Practical Reference for the Everyday Expressions of Contemporary American-English*. 3rd ed. McGraw-Hill Companies.
- Stone, Robert Karl (1970) *Middle English Prose Style: Margery Kempe and Julian of Norwich*. The Hague: Mouton.
- 須部宗生 (1999) 「語順固定の英語対句表現の一考察」『静岡産業大学国際情報学部研究紀要』1、39-68.
- 谷明信 (2003) 「初期中英語 the 'Wooing Group' の Word Pairs の用法とその特徴」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻 第2分冊、19-24.
- 一. (2008) 「Chaucer の散文作品におけるワードペア使用」『ことばの響き—英語フィロロジ—と言語学—』今井光規・西村秀夫 (編). 東京: 開文社、89-116.
- 渡辺秀樹 (1994) 「同意語並列構文の系譜」『英語青年』140. 6 (1994年9月号)、285-287.